

【資料紹介】

『切腹之切紙』

—江戸時代の切腹故実書—

コルネーエヴァ スヴェトラナ

はじめに

『切腹之切紙』（外題は『切腹切紙』）という資料は筑波大学中央図書館所蔵（請求記号：キ 300-211、資料ID：10076915941）で、保存状態もよく、江戸時代の刑罰的な切腹の故実を伝える貴重な写本である。本資料は電子化されており、筑波大学中央図書館のインターネットページ上に電子資料表示アイコンから進み、高精細画像を確認することができる。

形状

縦二四・五cm×横一六・六cm、六丁（原表紙を含む）の袋綴の冊子である。

## 成立と伝来

本資料の成立年は不詳であり、文中に記載がない。最後の丁に水嶋卜也之成<sup>(1)</sup>、伊藤甚右衛門幸氏、伊藤隼太幸充の名前が見え、この三人の著作であると見られる。水嶋卜也は一六〇七年生まれ、一六九七年に没した。切腹時の作法を伝える故実書に、江戸時代中期成立とされている伊勢貞丈著の『凶礼式』<sup>(2)</sup>が広く知られている。今回紹介する『切腹之切紙』の内容、すなわち扱う項目のみならず記述の順番なども含めて『凶礼式』と酷似していることが明らかであり、両資料の関連性は興味深い。一般的に言われているように、切腹の故実書は江戸中期以降のものがほとんどである<sup>(3)</sup>。成立の時期からして、『凶礼式』のほうが先か、あるいは『切腹之切紙』が先か、今後は他の故実書と付け合わせて検証する意義がある。

## 内容

本資料は、書名に「切紙」とあり、「きりかみ」「きりがみ」とも読む。切紙とは江戸時代、奉書紙などを折目どおり二つに切って、免許や伝授した内容、多くは秘伝を記したもので、伝承形態の一つである。本資料の場合、刑罰的な切腹を行う時の作法を伝えるという意味で使われた。

本資料の内容は、切腹が行われる場所の設営、切腹人の支度、髪型、切腹用の装束と葬儀用の死衣、畳、道具、最期の杯、切腹刀、介錯人の心得、死骸の後始末に関する解説からなっている。

## 〔釈文〕

凡例

- ・改行は原文通りとし、句読点を適宜付した。
- ・平仮名・片仮名の別は原文通りである。
- ・原文に濁点を補い、傍点を付した。

(原表紙)

切腹切紙

〔1表〕

切腹之切紙

- 一 寺院又ハ組頭の所にてても沐浴する段ニ盥を直し先へ下へ水を入、其上へ湯を入れて沐浴させ、髪を洗時ハ逆に湯をかくるなり。

- 一 髪結様ハ引さき元結<sup>(4)</sup> 四卷

左卷ニすべし。常のより高く

〔1裏〕

結、逆に曲也。

一 装束は白衣左前ニあわせ

柿色の上下を着す。口伝有之。

帯も白地なり。

一 畳の事、長六尺白縁ニ二畳

用意すべし。敷様口伝。

一 死衣の事、四尋長さ六尺、白地。

畳の上に敷様口伝あり。

〔2表〕

一 切手死衣の上に着座する時

三方<sup>(5)</sup>又は足打<sup>(6)</sup>切目の縁をは

なし、笹の葉先を切人江向、改敷<sup>(7)</sup>

して盃を弐ツ組付、上土器<sup>(8)</sup>下塗盃也。

扱肴は大根の香物三切、塩味

噌を組付、逆江箸を付居。



檢使へ三方盃一ツ、肴は大根  
香物一切組て居る也。

〔2裏〕

一 酒呑様之事。酌切手へ銚子を  
持行、逆手に酌して上の盃へ  
二献酌、其銚子を檢使の前へ

(一カ)

持行、順にへ献つきたる時、檢使  
切手へ挨拶して其盃を別  
台へ居て指之、切手夫<sup>三</sup>而<sup>二</sup>一献  
飲時に御肴と云へし。此時腹切刀を  
持出る。以上四献吞せ以後ハ切手

〔3表〕

献請るとも加へべからず。酌の古  
実也。酌人ハ腰指せぬなり。

(進カ)

一 酒終、刀出すと通出て双方の

膳を取、後へ上也。此時切腹人  
かしこまりやう口伝有之。

一 太刀取人の振舞、面影見  
する作法秘伝也。

一 首を打て死衣をかけ、屏風を

〔3裏〕

引廻し死骸を人に見せぬ様

仕廻すべし。此時の屏風ハ表

裏白張白縁なるべし。一隻

上下の文字を書て立様口伝。

一 死骸納様の事。屏風の内にて

下へ死衣を敷、死骸ハ沐浴

するニ不及。其儘入て落たる

首を柄杓の柄にてつき置、僧を

〔4表〕

めして刺刀をいた、かする品迄  
にて納る也。

一 桶の事。くみ数四拾九枚、是

四十九院<sup>(9)</sup>にかたとり輪六メ、

左輪にする。廻に経文。蓋にも

仏名を書也。

一 刀拵様ハ九寸の小脇差切先

七八分程出し、紙又ハ白布<sup>ニ</sup>て

〔4裏〕

逆に巻、仏名を書、公卿<sup>(10)</sup>の

切目の縁を放し切先を左へ、刃を

切手の方へなし出す也。若柄を

其儘置時は口伝。

一 往古ハ敷皮をしきて其上<sup>ニ</sup>て

討たす。此時ハ頭神を前へしかす

る也。敷皮の時ハ縁刺様に

古実有之。近代多ハ畳を用也。

〔5表〕

右一卷雖為秘事依御執心今

書寫進訖妄不可有他見候也。

水嶋朴也

之成

伊藤甚右衛門

幸氏

同 隼太

幸虎

〔現代語訳〕

切腹之切紙

一、寺院または組頭の所でも、沐浴する時は、たらいを直し、先下へ水を入れ、その上へ湯を入れて、沐浴させ、髪を洗時は、逆に湯を掛ける。

一、髪のかき方は、引さき元結四巻左巻にすべきである。通常のやり方より高く結び、逆に曲げる。

一、装束は白衣、左前に合わせ、柿色かみしもの上下を着す。口伝あり。帯も白地である。

一、畳の事、長さ六尺、白縁に二畳用意すべきである。敷き方について口伝あり。

一、死衣の事、四尋長さ六尺、白地。畳の上の敷き方について口伝あり。

一切手、死衣の上に着座する時、三方または足打の切目の縁を放し、笹の葉先を切人へ向け、搔敷かいしきにして、盃を二つ組み付け、上は土器、下は塗盃。肴は大根の香物三切、塩味噌を組み付け、箸を逆にして据える。検使へ三方に盃一つ、肴は大根香物を一切、これを組んで据える。

一、酒の飲み方。酌をする人は切手へ銚子を持って行き、逆手酌にして上の盃へ二酌、その銚子を検使の前へ持って行き、順に一献注ぐ時、検使が切手へ挨拶してその盃を別の台へ指し置き、切手はそれにてまた二献飲む時に御肴というべきである。この時に腹切刀を持ち出し、以上四献飲ませ、以後は切手が酒を請うても与えてはならず、酌の故実である。酌〔をする〕人は大小を腰に指していない。

一、酒を飲み終え、刀を出すと通い出て、双方の膳を取り、後ろへ回る。この時、切腹人の畏まり方について口伝あり。

一、太刀取の人の振舞、面影を見る時の作法があり、秘伝である。

一、首を打って、死衣をかけ、屏風を引き廻して死骸を人に見せない様に仕廻すべきである。この時の屏風は表裏白張白縁を使うがよい。一隻に上下の文字を書く。立て方は口伝による。

一、死骸の納め方。屏風の内に下へ死衣を敷き、死骸は沐浴しない。そのまま入れて、落ちた首を柄杓の柄に継ぎ置き、僧侶を召して、刀などの品まで納める。

一、桶の事。組み数四十九枚、これは四十九院に象り、輪を六つ締めて、左輪にする。廻りに経文を施し、蓋にも仏名を書くこと。

一、刀の拵え方、九寸の小脇差、切先を七八分程出し、紙または白布で逆に巻き、仏名を書き、公卿の切

目の縁を放し、切先を左へ向け、刃を切手の方にして出す。もし柄をそのまま置く時は口伝あり。  
 一、往古は敷き皮を敷きその上に〔首を〕討たせた。この時は頭身を前へ敷かない。敷き皮の時は縁の刺し方に故実がある。近年、多くは畳を用いる。

右の一卷は秘事であるといえども、御執心により備忘のため今書写を進め、他見あるべからず。

## 注

### (1)

江戸時代初期の礼儀作法の師範（「諸礼家」と呼ばれた）のなか、水嶋（すくや）卜也（一六〇七—一六九七）が代表格で、小笠原流水嶋系に当たる。小笠原流を学んで、小笠原流にとどまらず多くの礼儀作法書を伝えた（綿拔豊昭『礼法を伝える男たち』新典社、二〇〇九年、六四—七二頁参照）。陶智子によると、武家の礼法を伝承する家柄でいえば、鎌倉幕府の頃にはまだ主流となるものは存在しなかった。室町幕府になると、礼法に関しては將軍家が小笠原家と伊勢家を用い、江戸幕府は小笠原家を用いることになる、小笠原家が武家の礼法の主流になる（陶智子『日本人の作法』平凡社、二〇一〇年、十一頁参照）。

### (2)

伊勢貞丈著『凶礼式』（きょうれいしき；内題は「切腹之法」）の全文を近藤瓶成編『史籍集覧』第十七冊、臨川書店、一九八四年、二〇八—二〇九頁より左の通り転載する。伊勢貞丈は享保二（一七一八）年生まれ、天明六（一七八四）年没の武家故実の大家である。大隈三好によると、貞丈は江戸に生まれて、通称平蔵、安斎と号した。兄・貞陣が夭死して家名が断絶し、領地召上になったが、旧門の家柄だったため特別のほからいで貞丈が十歳の時に召し出され、旧地相模国（神奈川県）大住郡領の内三百石を賜わり寄合の列に加えられた。延享二年に御小姓組に入る。博覧強記で、家学を継承して有職故実に詳しく、武家故実の研究に一時期を画した。天明四年三月に老衰のため致仕し、同年六月に六十八歳で没した。著述が数百巻にのぼる（大隈三好『切腹の歴史』雄山閣、一九七三年、

一一〇頁参照。

切腹之法

一、寺院又ハ組頭の所にてても沐浴する時ハたらひを直し先下へ水を入其上へ湯を入れて沐浴させ髪を洗ときハ逆に湯を掛る法なり

一、髪結様引さきもとゆひ四まき左巻にすへし常よりたかくゆひ逆に曲るなり

一、装束ハ白衣左前にあはせ柿色の上下を着す口伝有之帯も白きなり

一、畳の事土色を用長サ六尺白縁に二畳用へし敷様口伝あり

一、死衣の事四口長六尺地也畳の上に敷様口伝

一、切手死衣の上に著座する時三方又ハ足打のきりめの縁をはなし笹の葉先を切人へ向改敷にして盃二つ組上土器下ハ塗盃也扱肴ハ大根の香物三切塩味噌を組付逆箸にして据検使へ三方に改敷せず盃壹つ肴ハ大根香物一切組之居る也

一、酒呑飲之事酌切手へ銚子を持行逆手酌にして上の盃へ二酌其銚子を検使の前へ持行順に一献つきたる時検使切手へ挨拶して其盃を萬臺へ居て指置切手夫にて又二献呑時に御肴といふへし此時腹切刀を揃出し以上四献のませ以後ハ切手献請るといふとも加ふへからず是酌の古実也酌人ハ腰さしせぬもの也口伝

一、酒終刀出すと通ひ出て双方の膳を取太刀をとり後へ廻る也此時切腹人畏り様口伝

一、太刀とりの人の振廻面影見る作法秘伝

一、頭を打て死衣をうけ屏風を引廻し死骸人に見せぬやうに仕廻すへし此時の屏風ハ表裏白張白縁なるへし一双上下の文字を書て立様口伝

一、死骸納様之事屏風の内にて下へ死衣を敷死骸ハ沐浴するに不及其儘入て落たる首を柄拶の柄にてつき置僧をめして刺刀をいただかする品までにて納る也

一、桶の事くれ敷四十九枚は四十九院にかたとり輪六ツ左輪にする廻に経文蓋にも仏名を書也

一、刀拵様ハ九寸の小脇指切先七八分ほど出し紙又ハ布にて逆に巻仏名を書公卿の切目の縁を放し切先を左へ刃を切手のかたへなして出すなり若柄其儘置時ハ口伝あり  
 一、往昔ハ敷皮を敷て其上にて討す此時ハ頭神を前へしかする也敷皮の時ハ白革縁刺様に故実あり近代多くハ畳を用ゐる

伊勢貞丈述

明治三十五年再校了

(3) 林 美一『時代風俗考証事典』河出書房新社、一九七七年、五八五頁参照。

(4) 元結(もとゆい) 髪の髻(もとどり)を結び束ねる糸、紐の類。古くは組糸または麻糸を用い、後世は糊で固く捻ったこよりで製したものをもちいる。もとい(『日本国語大辞典』第二版、第十二卷、小学館、二〇〇一年)。

(5) 三方(さんぼう)：現在は「さんぼう」とも 角形の折敷に、前と左右との三方に「刳形くりかた」もしくは「眼象」とよばれる透かし穴のあいた台のついたもの。多く檜のの白木で作られ、神仏や貴人へ物を供したり、儀式の時に物をのせるのに用いる。三宝。語源に関する説には、脚板ついがきの左右と前面とに穴のある台であるところから、三方ノ台の義や、三方を刳つてあるところから、三方刳形ノ衝重ついきさねの義などがある(『日本国語大辞典』第二版、第六卷、小学館、二〇〇一年；前田富祺監修『日本語源大辞典』小学館、二〇〇五年、五七九―五八〇頁参照)。

(6) 足打折敷(あしうちおしき) 折敷に足を取り付けたもの。足打ち。足付き。足付き折敷(『日本国語大辞典』第二版、第一卷、二〇〇一年)。また、折敷(おしき)とは檜のの片木へぎで作る角盆かくぼん。食器などを載せるのに使った。「足打折敷」「平折敷」「角」「そば折敷」などの種類がある『日本国語大辞典』第二版、第二卷、小学館、二〇〇一年)。

(7) かいしき(直・搔敷・皆敷と書く) 食物を盛る器や神饌に敷く木の葉、葉付きの小枝、または紙はまゆ・涙葉なみは・檜か・南天の葉などを用いる(新村 出編『広辞苑』第七版、岩波書店、二〇一八年参照)。

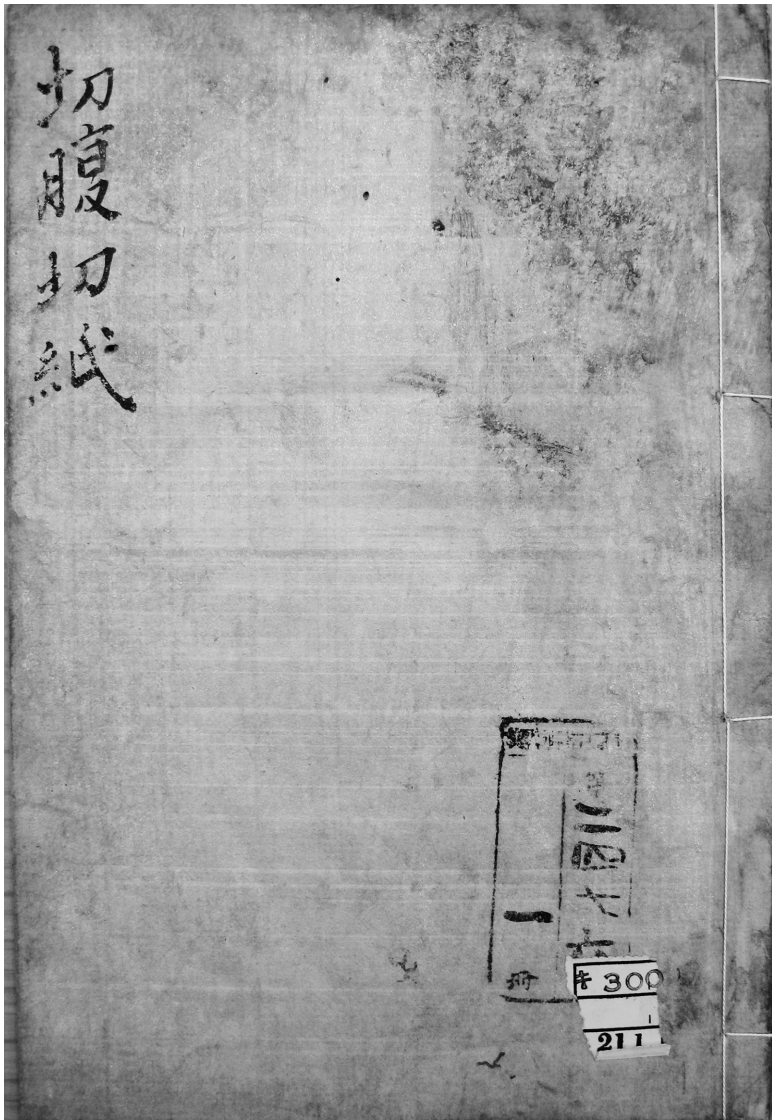
(8) 土器(かわらけ) ①釉(うわぐすり)をかけないで焼いた陶器。素焼きの陶器。②素焼きの杯。酒を飲む器(『日本国語大辞典』第二版、第三卷、小学館、二〇〇一年)。



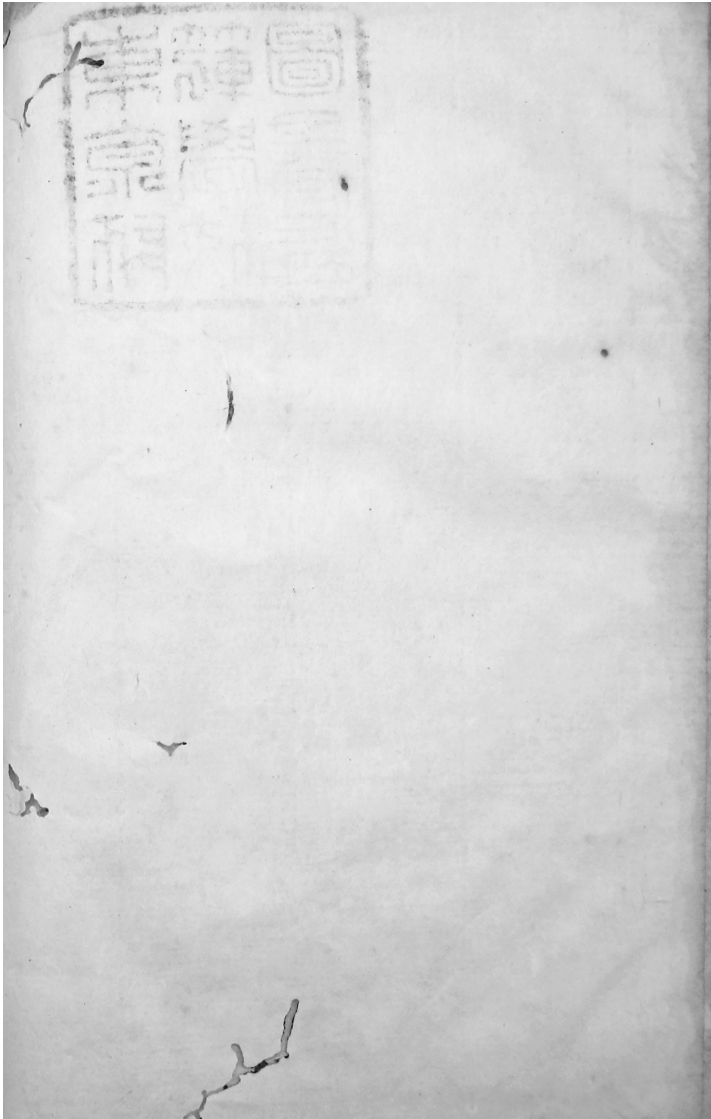
- (9) 四十九院（しじゅうくいん） 弥勒菩薩の居所である兜率天とそつてんの内院にある四九重の魔尼宝殿まにのこと。これに模して、平安時代以降、一寺院の境内に四九の堂宇が、また鎌倉時代以降、墳墓の周囲に四九基の塔婆が建てられた（新村 出 編『広辞苑』第七版、岩波書店、二〇一八年参照）。
- (10) 公卿（くぎよう）（「公卿衝重」ついがさねの変化した語か） 高貴な人の用いる食膳（『日本国語大辞典』第二版、第四卷、小学館、二〇〇一年）。

〔謝辞〕 本研究は「JSPS 科研費 JP20K13306」の助成を受けたものです。なお、本資料の「〔釈文〕」および「〔現代語訳〕」の校正において、研究協力者の横山輝樹氏の協力を得たことに謝意を表する。

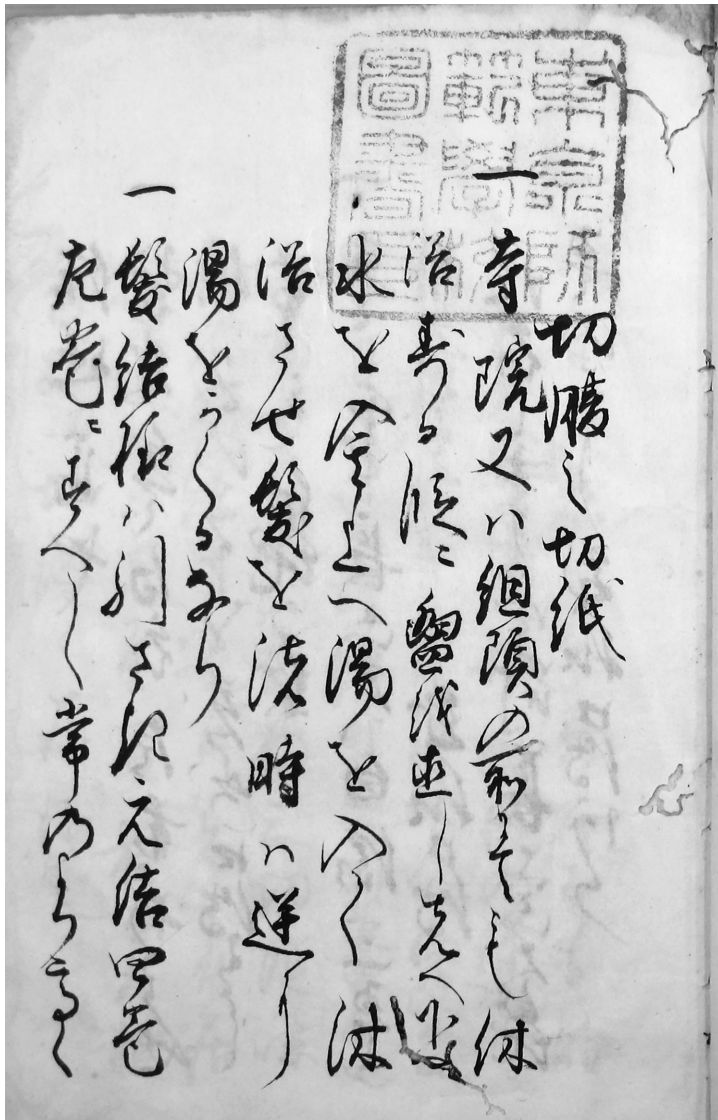
〔表紙〕







[1 表]



〔1 裏〕

結逆曲也  
一 袷束多白衣 袴袴わき  
村又のよりと若くは  
帯も白地の家  
一 袷事長六尺 白縁二重  
用意定一 袴袴  
一 死衣事 四町長さ 白地  
其のより 袴袴



[2 表]

一切手死なしくも居座し。時  
 三方又兵を打切目の保し  
 せ。毎の美えは切人の安否  
 して居し。或は細針と七羽衣を  
 相着る大根の香物三切の味  
 好く。と細針運る。安し。居  
 控便へ。三方居し。看る大根  
 香物一切細く居好く。

[2 裏]

一 酒 音 振 事 酌 切 手 匙 子  
 持 手 送 手 に 酌 手 持 手 入  
 二 献 酢 手 匙 子 授 使 力 前  
 持 手 酌 手 一 献 酢 手 持 手 授 使 力 前  
 切 手 授 使 力 前 手 持 手 授 使 力 前  
 手 持 手 授 使 力 前 手 持 手 授 使 力 前  
 飲 時 手 持 手 授 使 力 前 手 持 手 授 使 力 前  
 持 手 授 使 力 前 手 持 手 授 使 力 前 手 持 手 授 使 力 前



[3 表]

一 此法も、いかに通つても、却の古  
 實之、却人の腰、括せぬ、  
 一 酒、流り、出ると、通つて、双方、  
 括と、流り、上へ、此時、切、括り、  
 〇、一、通り、括り、括り、  
 一 此、刀、取、人の、振、舞、面、新、え、  
 〇、括り、括り、括り、  
 一 首、〇、括り、括り、括り、  
 〇、括り、括り、括り、

[3 裏]

引とて死體と人小見せぬ  
はとて——此時の屏風の表  
裏白激白縁うう——一變  
よとの文とてとて三枚の屏  
一死體納此の事屏風の角に  
入る死體と表死體の海流  
とてとて不ぬとてとてとて  
とてとてとてとてとてとて

[4 表]

免し利刀とてしるす事  
一桶と変く之を数回搖りて是  
軍九院とてしるす事  
左端とてしるす事  
佛名とてしるす事  
一刀拵ぬ九寸の小狼若切矢  
七寸程の紙又白布とて

〔4 裏〕

一、  
送小参井 若と事公師の  
切目の縁と教 切先と為と  
切手の方へて 出とる物と  
て候と付と口付  
一、  
付古ハ髪はくしきとて  
何と母時辰神と前と志とす  
うや若はの時の縁利取  
古実と送代とて候と

[5 表]

